
魔法世界みらい マギカ

鶴来絵凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界みらい マギカ

【Nコード】

N3055BA

【作者名】

鶴来絵凧

【あらすじ】

かつて。

ある一人の少女が、全てを投げうち、ある一つの願いを叶えた。

それは、あらゆる法則を凌駕した願い。

そしてその願いを以て、彼女は知らず知らずのうちに回っていた絶望のサイクルを止め

全ての魔法少女を絶望から救い出した。

これが、鹿目まどかの物語。

そして。

それから11年後のこと

彼女の弟、鹿目タツヤを軸として、再び魔法少女の物語が幕を開けようとしていた。

プロローグ・彼女の、願い（前書き）

どうも、鶴来といます。

「またお前か！」と、以前投稿していた物語を読んくださった方は、またページを見ていただけて本当に感謝です。

そして「誰だお前は！！」と、初めて私の文章を見てくださった方は、今後とも宜しくお願いします。

今回は二次創作に挑戦したいと思います。

題して

「魔法世界みらい マギカ」

あの有名な「魔法少女まどか マギカ」の二次創作です。

あえて言っておきましょう。

今になって、凄いプレッシャーを感じていると。

（有名だけにファンの方も多そうですし……）

この物語は鹿目まどかの活躍から11年後の世界、という設定になっています。

主人公はまさかのその弟、鹿目タツヤ君です。

さやかは勿論のこと、マミさんもほむほむも杏子も……出てきませ
ん。

11年後なのでさすがに田邊の理に導かれてるかと思ひまして……。

しかし、チャンスがあれば出します。

というか杏子出さずにまどか マギカの何が出来るてゲフンゲフン

……

…… スミマセン、調子に乗りすぎました……

えと、あの、のんびりと、多分二週間に一話くらいのペースで更新していくので、宜しく願ひします。

では……！

プロローグ・彼女の、願い

突然だが、独白しよう。

僕は死なない。

何があっても、決して死ぬことは無かった。

小学生の時の話だ。

小学校の校舎の一階で遊んでいた僕は、三階から落ちてきた花瓶で頭を打って死んだ。

否、死んだはずだった。

その時、確かに僕は上から落ちてきた何かで頭を強打された記憶があるし、その直後には粉々になった花瓶が僕自身の血と共に僕の周りに散らばって…そして、意識を失ったはずだった。

でも、現実とは違った。

花瓶が落ちたのは、僕の手前1メートルほどの場所で、僕は飛び散った花瓶の欠片で少しケガをしただけだった。

中学生に上がった時も…その入学式の日には僕は死んだはずだった。

入学式の日。

その日、僕は階段から落ち、自分の首の骨が砕け散る音を聞いて、そして絶命したはずだった。

でも、僕は生きている。

死してなお、生きることが許容されている。

確かに死んだ記憶を持っているのに、僕は生きている。

そして、たった今も

つい今しがた僕の頭を踏み碎いたはずのトラックが、すぐ目の前を通り過ぎていく。

さっきまで俯せで、自分の血を撒き散らしていた僕は、トラックが通っていった車道の手前で尻もちをついていた。

おかしい。

僕はさっきトラックに轢かれたはずなのに…

また、生きている。

そして、また、どこからか声が聞こえた。

「まだ死んじゃダメだよ、タツヤ……。…あなたには…私が出来なかった分、長生きして……。お父さんや、お母さんを守って欲しいの……。」

だから、生きて……。！！」

この声はいつも、僕が「死んだ」とき、優しく、温かく、僕を包み込むように語り掛けてくる。

誰のものかはわからない、最上の愛情に満ちた声。

これは、僕が「死ぬ」度にかけられてきた声だ。

誰の者かは知らないけど、この声を聞きたび、この声の主が僕を助けてくれたのだ、と僕は直感的に察している。

聞いていて、とても安心する声。

一体誰の声なんだろう。

この声の主は、僕が死ぬ度に助けしてくれるこの人は誰なんだろう。

そう考えているうち、僕は無意識の中である名前を呟いていた。

「まど……か……。」

第一話「好きなんでしょー!!」

さっきの「交通事故」の後。

通学中だった僕は、さっき死んだはずの身体を歩かせて学校に着き、自分のクラスの座席でぼーっとしていた。

まどかつて……誰？

あの声を聞いたとき、僕は確かにこの名前を口にした。

考えたわけでも、記憶していたわけでもない名前。

それは、どこか僕の心の深いところから一粒の泡のように僕の表面上に浮かび上がり、そのまま僕の口から飛び出てきたような……そんな名前だった。

まどかつて……誰だ？

さっき自分にした問いを、もう一度繰り返す。

「まどか……」

あえて口に出して言ってみると、どこか懐かしい響きがある。

しかし同様に、とても大切な名前だったのに忘れてしまった……という思いに僕の思考は悲嘆の方向へと向かう。

「まどか、か……。」

再びその名前を口にすると　突然、僕の肩に手が回され、無駄に元気な声で

「おーおー、タツヤ君にも遂に好きな人が出来たってことですか！

「！」

と叫ばれた。それも耳元で。

叫んだ張本人に振り向くと、案の定、そこには瑠璃色の短い髪をサイドで縛った、活発そうな少女がいた。

遥香のぞみ。

僕の同級生で、元気な声とそれに劣らぬ明るい性格に定評のある少女だ。

そして小学校のころから何かと僕に絡んでくる……言わば幼なじみのような存在だった。

「あの……好きな人ってどういう意味……？」

率直に僕が尋ねると、のぞみは赤いリボンで縛った短いテールをひよこひよこ跳ねさせながら、肩に回した手で僕の背中をバシバシ叩きだした。

痛いよ……。

「まあたまたまあ〜！！ さっきから『まどか、まどか』って呟いてるじゃないですかあ！！

好きなのかい好きなんだね好きなんですよ！！

そのまどかって子のことが！！」

「は……？」

そういえば……のぞみは早とちりが大の得意（？）だったっけ。

誤解は早めに解くのは定石だけど、特に彼女の誤解は早いうちに解いておいたほうが良い。

なぜなら、彼女はその早とちりをクラス中に言いふらすことがままあるからだ。

そんなわけで、僕は即座に彼女に返した。

「あの……別にそういうわけじゃないんだけど……。」

「ええー？」

「そっかあ……面白そうな話題だと思ったのになあ……。」

あっさりとのぞみは信じてくれた。

こういうところは、僕もいいな、と思ってる。

彼女は決して妙に食い下がったり、根掘り葉掘り詮索しようとはしないのだ。

……はやとちりではあるけど、ね。

その後、

「あ、そうだ。

上条っていうバイオリニストがすごいんだよ……！」

と喋りはじめたのぞみの話に相づちをうちながら、

「そうだ、まどかって人について、家に帰ってお母さんに聞いてみよう、」

と思いたつ。

……でも、どうしてこんなに気になるんだろう……？

考えてみれば、実のところ、それはただ僕が無意識の内に作り出した妄想かもしれないのに、僕は今朝からずっとこの名前について考えている。

……結構暇人だな、僕って。

そして

「ちよつとー？聞いてる？」

と、うわの空だったらしい僕に不平を現したのぞみの声で、僕の意識は再び現実へと引き戻されたのだった。

「いいですか、皆さん！」

可愛らしい童顔を厳しくこわばらせ、そう告げるのは、僕らが担任、早乙女 和子先生だ。

「女子の皆さん！！」

朝食が和食じゃないと文句を言うような男とは付き合ってはいけませんよ！！

そして男子の皆さんはそんな器の小さい男になってはいけません！！
そもそも、朝食というのはですね

先生は一息つくと、小柄な体のどこにそんなに不満が溜まっていたんだろう…というくらい的大量の不平をまくしたてた。

ああ……この調子だと…。

「……先生、また喧嘩したんだねえ…。」

僕の隣の席ではるかが小さくつぶやく。

何も言わず、僕は首肯してその説に賛同する。

早乙女先生……これで何回目だろ…。

結婚10年目の先生はしょっちゅう旦那さんと喧嘩する。

しかし、喧嘩するほど仲が良いといつかなんといつか……。

最近では三日間おのろけ話をし、その後二日間喧嘩の不平を言っていて……を繰り返している。

なんとという1週間サイクル……というのは正直どうでもよく、僕はホームルームを使って私情を暴露している先生に「はやくホームルーム終わらないかなあ……」という目線を送り続けている。

今日もそんな風に先生に目線を送り続けていると、ようやく喧嘩の話を終えたらしい先生は廊下の方を見つめながらそわそわしていた。

『……………?』

いつもハキハキしていた先生が少し戸惑っている、というめずらしい光景に、僕らの頭のうえにいくつか疑問符が浮かんだ。

そんな状況に気付いたのか、先生は慌てて佇まいを直して、言った。

「えーと……。

今日は皆さんに大切なお知らせがあります!!

教育実習生の方が来ました!!

どうぞ〜。」

ちょっと待て先生!!

それは彼氏の話の前にしておくべき話では!?

そんな教室の空気の中、教室に入ってきたのは

スラリとした体格で綺麗にウェーブがかかった髪。

きつちりと整えられた黄色いスーツがすごく似合っていた。
はつきり言って、かなりの美人の部類に入る人だ。

「志築仁美です。」

今日からこの教室で教育実習生として皆さんと一緒に勉強出来ることを、とても楽しみにしてました。

どうか宜しくお願いしますね。」

落ち着いた声で、そう丁寧に自己紹介した教育実習生を見て、クラスの男数名が口笛を吹いた。

……多分無意識に。

……どうやらかなりテンションが上がっているらしい。

「そのう……志築先生は私の教え子なんですネ。」

こうして見ると、改めて自分が歳をとってしまったしまったことを思い知らされて……」

先生はうう、とハンカチを取り出して自分の目に当てた。

……大げさな……と思っただけど、どうやら先生は本気で嘆いているらしい。

顔だけじゃなく性格も子供っぽいなあ……と教室中が半ば呆れた。

「ちょ、ちょっと早乙女先生……。」

志築先生もかなり困った様子らしく、助けを求めするように僕達を見渡して

そして、その目がある一点で止まった。

その視線は、僕の隣の席……のぞみに注がれていた。

「…………お？」

どうやら自分がじっと見られているらしい、と気付いたのぞみは首を傾げている。

志築先生は、そこでハツとしたように視線を戻すと、泣き崩れる早乙女先生を支えつつ教室を出ていった。

~~~~~

その日の授業は、一応何もなく過ぎていった。

「一応」というのは、授業中にも志築先生は終始のぞみのことをチラと見ていたからだ。

ただ、チラ見するだけで何もアクションを起こさなかったから、「一応」何もなかった、ということにした。

まあ…それを「何もなかった」で解決出来ず、1日中気にしていた人物が僕の隣にいるわけだけど…。

帰りのホームルームが終わり、その人物　朝からずっと首を傾げっぱなしでいるのぞみに声をかけてみた。  
すると

「あの先生、どこかで見たことがあったような…」

「見たことがある？」

「うん…。」

そうなんだよね…。

あの先生、どこかで見たことが…ううん…

ううー…！！

……ダメだあ…全ツ然わからん。

「

「だからあの先生、のぞみのことをじっと見てたのか…。」

「いや、それは違うと思う。

私が今言った『見たことがある』っていうのは何ていうか…

テレビで見たことがある…って感じの『見たことがある』なんだ

よね。」

「テレビ？」

でも、普通の先生がテレビ…？」

「うん、なんか最近、どこかで…

……むう、わからん。」

どこかで見たことがある、けど相手は知らない、か…

「なんかとんちみたいだね。」



とんちって……。

「あ、とんちって言えば、昨日、一休さんの再放送やってたんだ〜  
!?!」

「志築先生の話から一休さんの話に発展するって、その展開は早すぎないかな!?!」

「お前に足りないものは!!情熱!!!(中略)そして何より速さが足りない!?!」

「どこのク○ガーさんですか!?!」

僕とのぞみはその調子で一緒に帰宅し(家がご近所だったりするのだ)、のぞみから振られたはずだった志築先生の話は、のぞみ自身の手で上書きされた。

志築先生のことかわかったのは、それから四日後のことだった。

小休止1・円還会議マギカ マギカ!! (前書き)

まだ本編を一話しかやってないにも関わらず、もう小休止を入れることにしました。

何故か。

答えは一つです。

杏子が恋しくなったからでsゲフンゲフン……

どうも空気が乾燥してますねえ……

今まさに冬場まつさかり。

皆さんも風邪に気を付けてください!!

今回の小休止は、円還の理に導かれた魔法少女達のその後の日常を、ちよつとだけ妄想して書いてみました。

これからさらにこの小休止も発展させて、面白くなるよう頑張る所存ですっ!!

え？

発展したら小休止じゃないだろって？

……じゃあ大休止に名前を……

え……？

そーいう意味じゃない？

……細かいことは気にしたら負けなのです!! 居直り

## 小休止1・円還会議マギカ マギカ！！

その運命を全うした魔法少女達が集う、円還の理の世界。  
その中に存在する人気カフェ「アイ チーズ」にて

「さあて、突如始まったこのコーナーですが、皆さん準備はよろしいですか？」

アイ チーズの一番奥の席、そこを陣取る五人の少女の中で、青く短い髪の毛の少女が唐突に仕切りだす。

「さやかちゃん…、本当にいいのかなあ…。」

隣にいるピンクのツインテールの少女が申し訳なさそうな表情で、先程しゃべりはじめた青髪の毛の少女に話し掛ける。

「大丈夫だって！！」

そもそも、私達が戦ったところから11年後の世界ってさあ……私達残ってるわけ無いじゃん！！」

「でっ、でも、だからって勝手にコーナーを作っちゃうのは……」

「まどか。」

こうなった美樹さやかは何を言っても無駄よ。」

今まで沈黙を保ってきた黒い髪の毛の少女はしらーっとした目で美樹さやかを見つめた。

「そうね……あの時だって私達の制止を振り切って勝手に1人で魔獣を攻撃して……」

「そんなもって消えちまうんだから、世話ねえよなあ。」

まどかと呼ばれた少女の向かいに座る、大人びた雰囲気や黄色いウエーブがかった髪の毛の少女と、その隣、美樹さやかやかの向かいに座る赤い髪をバサバサのポニーテールにして水色のパーカーを着た少女が同意する。

「ちよっ……!!」

「マミさんや杏子までほむらの肩を持つのかよー!!」

どうやら黄色い髪の少女がマミ、赤い髪の少女が杏子というらしい。

「さやかちゃん、落ち着いて……」

自分の行動に反対する勢力が、殊の外多いという事実に対し少し狼狽する青髪の少女。

それを落ち着けようと、まどかはオドオドしながら宥める。

これがこの各々の戦いを終え、円還の理に導かれた魔法少女達の日常である。

……とりあえず、この喧嘩(?)が納まるまで、元の世界、鹿目タツヤの世界に話を戻そう。

「あー!!……!!」

「こら、話を戻すなあ〜!!」  
さやかのかきも虚しく、カメラはフェードアウトした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3055ba/>

---

魔法世界みらい マギカ

2012年1月9日00時48分発行